【2022 年度第 2 回研究会特別講演会報告】

アイヌの芸能に登場する鳥について

武 田　忠 義

アイヌの歌や踊り、神謡等には実に様々な動物が登場する。それらの行動の描写や意味づけはアイヌの人々の生活や世界観に根ざしたものであるとともに、的確な観察力や想像力の豊かさ、遊び心には驚かされることがしばしばである。

しかし、今日伝えられているアイヌ語や芸能等に現れる動物名や生態の解釈は、必ずしも動物学的知見に基づくものではないため、動物学的な視点から新たな理解が可能な場合がある。発表者は民族学に関しては門外漢で野鳥に関してもアマチュア観察者に過ぎないが、アイヌの芸能に登場する鳥類について、従来とは異なる解釈を幾つかを紹介したい。

1. シマフクロウ

kotan-kor-kamuy コタンコロカムイ（村を守護する神）などと呼ばれ、特に大切な神とされる。餌となる魚類が豊富な不凍河川と巣となる大木のある豊かな森林が揃った環境に生息することから、アイヌの世界にあってその存在は、想像上の神に留まらず、コタンに食料と水（交通）が約束された豊かな暮らしを約束する、生物多様性がもたらす生態系サービスの象徴そのものだったのだろう。

しかし、浦河地方の「コタンコロカムイ・リムセ」以外の芸能は意外と残されていない。そのカムイノミは格式の高さから参加者が限られ芸能としては残りづらかったとの説があるが、本種が住むような環境は早い時期から和人が入植したであろうから、何よりも本種が、そしてそれとともに在ったコタンの暮らしが急速に消失し、両者の繋がりが途切れたことが、この種にまつわる芸能が少ない理由ではないだろうか。浦河地方にシマフクロウの踊りが残ったのは、比較的最近までこの種が身近に生息していたためかもしれない。浦河町在住の堀悦子フチによれば、子どもの頃、母親の遠山サキフチから実際にシマフクロウの鳴き声とその意味を教えられたという。

2. アマツバメとオオジシギ

アマツバメは気流に吹き上げられた飛翔性昆虫を捕食するために高空を飛ぶが、雨の後には地表近くに集まる昆虫を追って低空を群れで飛び交い、その様から「雨燕」であるとされる。アイヌ語の ruyampe-cikap ルヤンペチカプ（雨・鳥）も同義であろう。アマツバメを題材とした踊りは、チャクピヤㇰ（平取）、チャピア（静内）などが知られ、何れもアマツバメが群れ飛ぶ様を模したものと説明されるが、アマツバメの伝承は発表者が調べた限りでは見つからず、アイヌの生活との関係が薄かったのではないか。

一方、更科・更科『コタン生物記III』（1977:577-579）は、これらの踊りはオオジシギの声や動作の模倣ではないかと指摘している。オオジシギは農耕地周辺に生息し、その特徴的な声や求愛行動（複数のオスがズビヤーク、ズビヤークと鳴きながら上昇と急降下を繰り返す）からアイヌの人々にも印象が深かったようで、よく知られた神謡にも残されている。

チャクピヤㇰをアマツバメの踊りであると断定するには注意が必要かも知れない。

3. ワタリガラス

普段目にするハシブトガラスやハシブトガラスよりも一回り大きく、人里には近寄らずアザラシやエゾシカの死体を餌とし、「クワッ」「ハポン」といった多様な声を出す。

onne-paskur オンネパシクル（老大なる・からす）等の名前が各地に残り、かつては飼育してカムイノミを行うこともあったようだ（吉原、私信）。現在は冬に少数が道東の海岸部などに飛来するのみであるが、死肉を好むこの鳥は、獲物が多かった時代には珍しいものでなかったかも知れない。また、餌をもたらしてくれる大型肉食動物に付き従う習性から、アイヌの猟師にとって馴染み深い存在だったかも知れない。

白糠地方の鯨踊りの歌「クワクワ ワクワク…」は通常「寄り鯨に群がるカラスの声」とされ、さらに更科・更科（1977）はこの踊りはハシボソガラスの生態を模したものとしているが（596 頁）、その音声模写と死肉に群がる性質、さらに現在でも本種が見られる道東の海岸であることを考え合わせると、ワタリガラスの可能性がより高いと考える。

4. カッコウとツツドリ

両種は非常によく似た形態であるが、声はそれぞれ特徴的であり、カッコウは kakkon-kamuy カッコンカムイ等と、ツツドリは tutut トゥトゥッ等と呼ばれる。（和名は火吹き竹を吹く音のように「ポ、ポ」と鳴くことから）

カッコウには hemoy-cikah ヘモイチカハ（カラフトマス・鳥。鳴きだす頃マスがとれる）という呼び方があり、その意味の歌（支笏川に魚いないと利別川に魚沢山いる…）もあるが、カラフトマスの遡上開始は 8 月、カッコウの初鳴きは 5 月末なので矛盾がある。本来は、5 月に遡上が始まるサクラマスを指した名称や歌だったのではないかと思われる。

同じような内容と歌い回しでツツドリの歌もある。ツツドリはカッコウより早く 5 月初めに鳴き出すことから、サクラマスの遡上時期の違いに応じて、或いは環境の違い（カッコウは農耕地や河川敷、ツツドリは山林に生息する）によって、良く似たどちらかの種を歌に取り入れていたのかも知れない。

5. アホウドリ

芸能とは関係ないが動物学と民族学／考古学のシナジーの例として紹介したい。

かつては小笠原諸島や伊豆諸島などで多数が繁殖していたが明治以降の乱獲のため一時は絶滅したと思われた。各地にアイヌ語が残り、礼文島のオホーツク文化期の遺跡から本種の骨が大量に出土したことから、かつては北海道にも多数が飛来していたことがうかがわれる。しかも礼文島の骨の分析から、現在ではごく少ない尖閣諸島で繁殖する個体群が、当時は多数飛来していたことが判明している。（現在は日本海側では見られない）

また、沖合に生息する本種をどのように捕獲したかだが、iperusuy-cir イペルスイチリ（空腹な・鳥）の名前から想像するに、おこぼれを目当てに漁船に付きまとう習性を利用し、魚を餌に釣り上げたのではないか。また repun-siratki レプンシラッキ（沖の卜占神）は、沖の魚群に群がるこの鳥に、漁の水先案内を託していたのであろう。先人が遙か沖合で、本種の採餌行動に変化（船への接近）をもたらすほど、恒常的に漁労を営んでいたことがうかがわれる、動物学的にも興味深いアイヌ語名である。

（たけだ・ただよし／日本野鳥の会）